呉服生地で作務衣創作
控え店主の大胆挑戦
国際展開も視野に

飛田一市（かずいち）さん(69)は商店街で40年以上呉服屋を営んできた。昨今人通りが減って若い人も着物を着なくなった。このままだと家業も先細りになるが、先が細くなるのは針だけでいいと、この度作務衣（さむえ）を専門にした商売を思いついた。作務衣は下がズボンだ。奥さんから和裁を習い覚えた器用な飛田さんは、早速、ズボンを解体して自分で型紙を作り上げミシンも器用に操る。山形から二十歳の時に大阪へ来て以来、古着問屋で働いて着物地の知識を身につけた。同所で奥さんと知り合い、5年後結婚を機に独立して現在の「小福屋」を開いた。奉公先が「大福屋」なのでそれより控えめな名前にしたという。おふくやと読むが皆がこふくやと呼ぶのでそれも受け入れている。1点毎が2つと無いオリジナルになる。新たな挑戦に意欲を燃やす飛田さんである。

九死に一生
しじみ採りに川を横断中

大和川にしじみ採りに出かけた糸賀陽治さん(11)が気づくとチンチン電車は既に川を越えようとしていた。一つ前の駅で下車すれば川口に座礁している潜航艇の残骸の近くのしじみがたくさん採れる場所に近い。七人もの年下の子供達を連れていた陽治さんは遠回りで橋を渡って戻ることを嫌い川を一気に渡ろうとした。浅いとはいえかなりの水の力に危なく流されそうになりながら両手両脚には子供達、頭の上に服をくくりつけ、なんとか対岸まで

「潜航艇はどっちや!」

「必死やった」

辿り着き事なきを得た。陽治さんはその後の会見で「電車代は一律5円であれば関東炊きが食べられるのに勿体ないと、歩いて戻ることを考えたが死ぬかと思った、子供達を守らねばと必死だった」と語る。一方、大阪の海水浴場への電車では大人に混じって改札を抜け5円をごまかし関東炊きを買おうとする小学生が後をたたず、対策が急がれている。

社説
知恵を共有し街を共に生きる

日本には「敬老の日」という立派な記念日があるが、もともと兵庫県のある村の村長と助役が「老人を大切にし、年寄りの知恵を借りて村作りをしよう」という発想から農閑期に「としよりの日」という日を設定したものが全国に拡がったのだという。今ではすっかり形骸化してただ祝日だとか、祖父母にプレゼントをする日のような認識でいる場合も多い。本来の目的である「知恵を借りて村作り」という部分が消えてしまっているのだ。

お年寄り達には長い時を過ごしたからこそ得られる「知恵」がある。一年に一日だけ優しくするばかりが敬老ではなく、日頃から思い出話や知識に耳を傾け、その個人的な歴史体験の中から、これからの我々がどのように生きて行けば良いのかのヒントをつかむ事こそが正しい意味での敬老なのだろう。西成での地道な試みである「なるへそ新聞」が暮らし中で昔の話を聞いていくことを日常化し、一緒に街を生きる事が出来ればと願っている。

●求人広告●
新聞記者
西成なるへそ新聞
男女問はず・経験不問
年齢・学歴不問
五五一〇の五の三一 鈴木秀美内
ブレーカープロジェクト
〒557-0051 大阪市西成区萩之茶屋1-5-7
TEL 070-5046-8607

夜中の餅つき
～家族思い決行～

歳末の寒さ入れ時を迎えた飛田本通商店街は、多くの客で賑わう。紳士用の帽子を販売する「ニューベロア堂」は、一日最高で百五十個の帽子を売り上げる繁盛ぶり。店主の古川塩八さん(42)は「商売人は他人が遊んでる時に仕事をするもんや」と普段から小学生の息子弘弘さん(11)に語り、盆も正月も店を開けていた。しかし今年は普段年末らしい行事を経験していない家族を思い、餅つきを決断。閉店後の午後十時過ぎ頃からペッタンペッタンと餅つき大会が始まった。仕事後の餅つきは体に堪えた様子で、「家族は喜んだがもうこりごり」と塩八さんは話す。

少年の日堂

母がお釜でご飯を炊き、姉が家の前の七輪で魚を焼く。よくある夕食の風景だ。中に入っている炭や木炭の販売がめがねくん(10)の家業であり、今日も父は朝から忙しそうだ。めがねくんの朝は早い。食事をすませると、走って学校に向かった。戦争の後、金塚小学校はとても生徒数が多く、運動場にまでプレハブの教室が建てられていた。狭い運動場はいつも取り合い、学校に着くと、早速ドッチボールをして遊んだ。勉強や遊びの間には家業の手伝いもした。石灰の入った重いカマス袋をタイヤが太く大きな運搬車で食堂に届けに行く。いつも食堂は単身の男性で賑わっている。

黒い雲 新作「月待」其待

白夏出版で一〇〇部発行し、阿佐野の寺方でベストセラーとなった同人誌「風車」の著者・黒の信子氏の新連載が始まる。詩的な文体で西成の風景を描き出す黒の氏の待望の新作を"依頼執筆中。■黒の信子（くろだのぶこ）鹿児島市生まれ。生家の近くに住んでいたNHK作家宮川一郎氏の縁で大阪NHKでレポーターとして勤務。その後、昭和49年に同人誌「風車」第一号発刊。昭和49年まで六号発行した。

人と

秋葉忠太郎さん

本紙で八文字格言を連載する秋葉さん。小学校三年のころ、凍てつく北海道の石狩川で、前かけ一枚姿で土を運び出す建設現場の労働者を目の当たりにし、社会の真実を知る。人生を左右する出来事となった。翌年より俳句を始め、早朝四時から八時にかけて、新聞の切り抜きとチラシ裏に詠む俳句は毎日欠かさない。ただし現在阪神三連敗中で「ハンシンフズイ」の百一歳。

異人の墓で夕涼み

野球小僧の夏の楽しみ

金塚小学校の裏は花土山と呼ばれる赤土の高台で異人墓地と広場になっている。普段は飛田の球児に軟式ボールをあてて練習しているが、皆でとなると「異人墓地いくぞ」と声をかけ広場に行く。

ピッチャーの長野君や北野子のしげ君(10)は年たくて上が少し丸い果人さんの墓が、どこの国の墓なのか不思議に思いながらも、暑い春節のタオに少し冷えた墓石が野球としたあとの火照った頬にひんやりと気持ちがよく、つい寝ころんでいる。

タコに吸い寄せられて♥

新開筋商店街にある衣料雑貨店が、先ごろ淡路島の五色町から可愛らしいお嫁さんを迎えた。このたびの慶事は瀬戸内海で獲れたタコが結んだ縁だという。戦中戦後は疎開や買い出しで大阪から淡路島へ渡る人も多く、新婦の父下野勝郎さんはそのような人たちを厚くもてなした。あるとき獲れたばかりのタコを差し入れたところ、これがたいそう美味しいと、以来毎年のようにやって来るようになった人があった。妥協が大阪に嫁ぐことになって、その人の力添えもあり、紅白の幕を掛けた立派な嫁入り道具まで誂えたという次第。「派手なこともなくごく普通」と控えめに語る若い二人で、これから店を盛り立てていく。

西成お地蔵様巡り(三)

立江地蔵

子どもが健康に育つように願いがこめられている。おそらく徳島の弘法大師の立江寺にあやかって名づけられた。お婆、小浜がNさんの二階に住んでいて人生幸朗などが来て漫才をしてとても賑やかでね、炊き出しもして近所に配ったよ。お参りは500人ぐらいかな（山王2丁目5のあたり）柳本京子

【文化】オーエス劇記

山王には大衆演芸場がある。昭和年代後期のすさんだ演芸風料の地にふさわしい所でもある。演題は「喜知次居」「博多人形」「女形芝居」「恵知恵喜さん」そして拉致を題材とした「拉致、母千里」等。特筆すべきは「恵知恵喜さん」であろう。下達ものとはいえ現がにもマッチするエピソードを交えた功妙な芝居であり、孫と婆のペーソスは見事である。加えて劇中での婆の役者（沢田ひろし）の座開振りを表現する時のタオルを固く巻き、一気にハチマキにする時の舞やかさ、さすが幼い時から鍛えられた役者魂そのものの仕草である。孫は婆が嫁に何を訪えているのか観る人に考えさせる妙がある。そして「女形芝居」これも圧巻である。衣裳といい化粧といい又扇るのなんと上手く操ること。そして身の熟し方・唖然とする。「女でもこんな綺麗な人いないでて」という台詞のスター！ですが、新聞を読む、いろんな物に書いています。これからも続くでしょう。お楽しみに

秋葉忠太郎の百年目の新連載
（二面八段）

河原 嘉子（矢吹）

8文字熟語のスター！ですが、新聞を読む、いろんな物に書いています。これからも続くでしょう。お楽しみに

新福祉荘
若手のアーティストやクリエイターの入居者募集中。
詳しくはBreaker Project ☎070-5046-8607

ニューベロア堂
帽子専科

人法社福祉会社
会りどみ王山
5-6-1王山

ナイスな視線で日常の楽しみをお届けする西成発の無料地域情報紙
なるへそ
毎月10日発行!

酒類 食品 雑貨 販売
本柳商店
号4番21目7丁1王山